Life Saver

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｉｆｅ　Ｓａｖｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ３６９８Ｎ

【作者名】
壇　敬

【あらすじ】
スペースシップビルダーだった僕は、船の修理中に事故に巻き込まれて、宇宙の彼方に吹き飛ばされてしまった。気が付くと『大いなる意思』に包み込まれていた…。

（前書き）

遂に『祭』に参加してしまいました。
えぇ、そ～っすよ～。
『空想科学祭２０１０』ですよ、あ～た。
ホントの「前哨」として習作（ストック分）をアップしま～す。

水の流れる音がする。
サラサラと流れる音。
どこかの渓流なのか。
ひんやりした空気も流れている。
シットリとして、やや冷えた感じの心地良い風が吹いている。
どこかの山の中なのだろうか。
わからない。

ただ、実体感が妙に薄いのだ。
確かめようとするが……ダメだ。
目が開かない。
それに、身体も動かせない。
縛られている訳ではないのだが、身体に力が入らないといった感じだ。
だいたい、体の姿勢さえも分からない。
立っているのか、座っているのか。
横たわっているのなら、仰向けなのか、うつ伏せなのか。
そう、そうなのだ。
重力の感覚が乏しいのだ。
何処に居て、どうなっているかは全く分からないが、身体はとてもすがすがしい。
まるで、生き返ったようだ。
……生き返ったよう？
僕は死んだのか？
いや、そんなことはない。
身体の感覚は十分に感じている。

しかし、どうしてこんな所に居るのだろう。
どうしてなのだ？
……。
待てよ。
あぁ、少しずつ思い出してきた。
確か、僕はビルダーだ。
スペースシップビルダー。
恒星間宇宙船「エリクソン」を修理していたのだ。
極小デブリの衝突によって、外殻破断を修理していたんだ。
そうだ、そうだ。
内殻にあった水素ガスのパイプまでデブリが食い込んでいたのに、それに気付かずに処理しようとしたら、水素ガスで吹っ飛ばされたのだ。
エリクソンは見る見る小さくなり、スペースドックの領域さえ五秒程度で飛び去ってしまったんだった。
宇宙服は大丈夫だったが、宇宙空間活動装置がダメージを受けたのだ。
姿勢制御は当然利かない。
緊急救助コールもオシャカだった。
最大の問題は、生命維持装置だった。
リモート装置はコントロール不可能、インジゲータも正しく表示していない。
どれだけ酸素が持つか、二酸化炭素は除去しているか、温度の恒常性は維持できているか、時間経過しないと分からない状態だった。
あらゆる方向が同じ景色になって、それだけ時間が経ったのだろう。
やがて、足の感覚が無くなってきた。
どうやら、温水の循環が止まったようだ。
やがて、手の感覚も無くなるだろう。

程なく、めまいがしてきた。
息苦しくはないのだが、頭が割れるように痛くなった。
二酸化炭素の除去がダメになったようだ。
そのうちに、気が遠くなったのだ。

それじゃ……助かったのか？
押さえられていたものが外れるように目を開けた。
すると、ゼリー状の物体の中に自分の体が浮いていた。
宇宙服は脱がされ、裸の状態だった。
ほんの少しだけだが、首を動かすことができた。
左手は肘から無く、両足は付け根から無かった。
辛うじて残った右腕は、掌まではあったが指は無かった。
愕然とした。
痛みもなく感覚も普通だっただけに、ショックが大きかった。
ショックで叫ぼうとしたが、ゼリー状の物体がそれを阻止した。

しばらくの間は混乱していたが、痛みがなくて感覚が普通だったからか、精神的ショックの収まりが思いの外、早かった。
落ち着いてくると、周りを見回す余裕が出てきた。
そういえば、ここはどこなんだろう？
素朴な疑問が浮かんだ僕は、動かせる範囲内で周りの様子をうかがった。
目を凝らすと、周りにも人影らしいものがある。
よくよく見ると、いくつかの影は人間のようだが、その他の大部分は、角が生えていたり、六本や八本、中には十本以上の腕や足を持ったものや、羽があるもの、金属の体の者もいた。
だが、全てに共通しているのは、どこかが傷付いていることだった。

その時、頭の中で声がした。

「我は『ライフ・セーバー』である」
「宇宙で生きとし生ける者の保護者である」
「同時に、生き物のサンプラーでもある」
「宇宙に生きた、生き物の証を集める」
驚きを隠せなかったが、そんな気にはならなかった。
安らかな気持ちになった。
ゼリー物質がそうさせたのだろうか。
「我はライフ・セーバーである」
「生き物のサンプラーでもある」
「我は……」
その声を聞き終わる前に、僕は深い眠りに落ちた。
心地良い仮死状態の中に。

（後書き）

是非、是非、感想をよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3698n/

Life Saver

2010年10月9日12時16分発行